# 「第 18 回　さくらサミット　in　せんぼく」

## 会　議　録

平成 21 年 7 月 11 日（土）

角館交流センター・多目的ホール

主催／秋田県仙北市

**■主催者あいさつ**

**仙北市長　　石黒　直次　氏**

ただいまご紹介いただきました、地元仙北市長の石黒です。

本日は、第 18 回さくらサミット in せんぼくを仙北市で開催することになりました。加盟 20 団体のうち 8 自治体、オブザーバーとして 2 自治体、さらには県内の自治体からも参加していただいております。また、市民の皆様はじめ、この会にお越しいただきました皆様に、心から歓迎申し上げたいと思います。

仙北市といたしましては、合併前の角館町時代、平成 3 年に第 4 回さくらサミットを一度開催しております。したがって、今回は 2 回目となります。私どもと同じように、桜をひとつのテーマとし、まちおこし、まちに元気を取り戻そうという取組みをしている全国の自治体が集まって、このサミットが開催されているわけですが、仙北市におきましても、また他の自治体におきましても、「うちの桜はほかには負けない」という自負がある一方、何とかしてそれを活性化につなげていきたいという思いは、皆同じだと思います。仙北市もいい桜を持っておりますが、それをいかに活力につなげるかということで、全国からお集まりの皆様のご意見を聞きながら、今後の参考にさせていただきたいと思っております。

毎回いろいろな観点からテーマが決まっていっておりますが、この度は「さくら・景観」ということで議論することとなりました。景観というもののとらえ方は様々かと思いますが、単に美しければいいというだけではなく、そこには最終的には交流・観光、そしてまちの元気につながる何かがあるはずだ、と思っております。この会が実り多い会となることを祈念し、今日お集まりいただいた皆さんにあらためて感謝を申し上げ、主催者を代表してのあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。

**■来賓あいさつ**

**秋田県仙北地域振興局・総務企画部長（秋田県知事代理）**

**松田　信義　氏**

仙北地域振興局の松田と申します。知事からメッセージがありますので、代読させていただきます。

本日、第 18 回さくらサミットが仙北市におきまして、このように盛大に開催されましたことに、心よりお祝い申し上げます。また、ご臨席の皆様におかれましては、日ごろから本県の観光振興に多大なご尽力をいただいており、厚く御礼申し上げます。

この度の角館でのさくらサミットは、今回が 2 回目ということでありますが、ご案内のとおり角館は秋田を代表する桜の名所として、県の総合観光パンフレットの表紙を幾度も飾っております。そういう意味では、名実ともに桜についての秋田の頂上というにふさわしい場所でのサミット開催と考えております。

古来より花といえば桜を指すように、桜は、私たち日本人が、最も愛でてきた花です。だれからも愛される桜をテーマに、全国 20 に及ぶ市町村がともに連携し、まちづくりについての理念や課題を毎年共に検討し、さらなる活性化を図るため、努力しておられることに、深く敬意を表します。各地で開催されている桜のイベントは、県内外から多くの流動を生みだしており､交流人口の増加による地域活性化に大きく貢献しております｡また、観光には多くの産業が関連しており、地域経済への波及効果も非常に大きいものがあり、地方から中央へ様々な資源が流出している中で、それらを地方に呼び戻す重要なツールになっております。

本日のサミットにおきましては、活力あふれるまちづくり、地元が誇れるまちづくりなどとともに、県内外から多くの観光客に来ていただき、共に感動を分かち合うための方策などについて、実りあるご議論をご期待申し上げます。最後になりますが、本日全国各地から参加されている市町村のご発展とご臨席の皆様のご健勝をご祈念申し上げ、あいさつといたします。

平成 21 年 7 月 11 日、秋田県知事　佐竹敬久。

**■サミット全体会議**

**コーディネーター　：篠田　伸夫　氏**

**パネリスト：富田　泰　氏　　（北海道新ひだか町・副町長）**

**：小坂　和弘　氏　　（福島県富岡町・産業振興課長）**

**：佐藤　真理男　氏　（茨城県日立市・産業経済部長）**

**：飯窪　英一　氏　　（東京都北区・地域振興部副参事）**

**：北岡　篤　氏　　（奈良県吉野町・町長）**

**：松本　崇　氏　　（長崎県大村市・市長）**

**：杉野　貴文　氏　　（熊本県水上村・参事）**

**：石黒　直次　氏　　（秋田県仙北市・市長）**

**オブザーバー：加藤　雅通　氏　　（青森県弘前市・公園緑地課長）**

**：金武　裕司　氏　　（岐阜県各務原市・水と緑推進課長）**

**：五十嵐　忠悦　氏　（横手市・市長）**

**：山崎　文幸　氏　　（大仙市・文化財保護課主幹）**

**：遠藤　民雄　氏　　（井川町・産業課長）**

**：小林　宏和　氏　　（美郷町・商工観光交流課長）**

**篠田**：ただいまご紹介にあずかりました篠田でございます。先ほどのご紹介にもありましたが、私は、平成 10 年に第 10 回サミットが東京都北区で開かれた際、コーディネーターをやってくれという話があり､以来今日まで 10 年間コーディネーターを務めております。大変ふつつかではありますが、よろしくお願い申し上げます。

さくらサミットは、今回で 18 回目ということです。前回は平成 19 年に、ご当地仙北市さんとは姉妹都市の関係になります長崎県大村市で開かれました。今回は、大変見事なバトンタッチをしていただきました。

このさくらサミットは、一体いつから始まったか、少しご説明したいと思います。昭和 63 年が第 1 回でした。島根県に木次町という町があり、現在は合併して雲南市という名前になっておりますが、こちらで開かれました。山陰の小さな町がなぜ全国的なサミットをと、不思議に思われるかもしれませんが、実はそれには訳があります。昭和 62 年 6 月に、第 4 次全国総合開発計画が策定されたことは記憶されているかと思います。その基本目標は、多極分散型国土の形成というものでした。コアになる極を日本列島の随所に分散し、

国土の均衡ある発展を図っていこうというものでしたが、開発方式として当時打ち出されたのが、交流ネットワーク構想というものでした。それには 3 本の柱がありましたが、そのうちの一つが、「都市と農村との広域的交流やイベント開催など、各地域の特性を生かした多様な交流の推進」でした。昭和 63 年前後は、地方発のイベントが各地で開かれ、実は私自身も岐阜県で 73 日間、ぎふ中部未来博覧会という博覧会を責任者としてやってきました。当時は本当に博覧会だらけだったなという思い出があります。そういうイベントの一つが、このさくらサミットだったわけです。

このさくらサミットは、先ほど申しましたように今回で 18 回目です。よく続いたなという感じがします。昭和 63 年に生まれた赤ちゃんは、今年で 21 歳になるわけですから、すごいことだと思います。これはすべて、とにかく続けていこうよという市町村長さん方の高い志のなせる業だと思うわけですが、桜というのは、そういう不思議な力を関係者に与えてくれるものなのですね。

前回、大村市で開催されたときのテーマは「わがまちの桜とまちづくり」でした。空洞化する中心市街地の問題を桜によってどう解決できるかということだとか、通年観光、つまり年間を通して観光をどう作っていけばいいかということについて、話し合いました。今日のテーマは、「さくら・景観」です。美しい景観を継承していくためには、桜だけではなく、歴史的建造物だとか、ソフトの伝統行事などの地域の宝を生かし、どうまちづくりを進めていくか、そんなところが今日の話し合いのテーマかと思っております。

さて、これからの進め方ですが、最初に各自治体から 5 分以内で事例発表をしていただきます。その事例発表を受け、フリーディスカッションに移ります。景観を「守る」、「作る」、「見せる」という 3 つのキーワードで進めていきたいと思います。

それでは、最初に地元仙北市の石黒市長さん、よろしくお願いします。

**石黒**：仙北市は桜の時期には、たくさんのお客様がお見えになります。1 シーズンで、今年は 126 万人という入り込み客数でした。桧木内川という川の堤防に 2km に渡って、樹齢 75 年くらいになるソメイヨシノのトンネルがあります。このトンネルはさらに延長し、現在は約倍の 4km 弱に伸びております。また、もう一つは武家屋敷通りと呼ばれる、古くから伝わる武家屋敷群の中に、シダレザクラがたくさんあります。その樹齢は 200 年、250 年というものも数多く見られる桜で、国の天然記念物に 162 本の指定を受けています。

こういったものがお客様の興味を引き、この地に来ていただいていると思っております

が、きれいに咲いた桜をまた来年もきれいに咲かせるという努力も必要です。そのために、例えば桜が終わった後に、毎年地元の中学生が堤防の桜に肥料をやってくれます。また、桜のきれいに咲いている時期には、角館の桜の由来などについて、小学 4 年生の子どもたちがグループを組んで、観光客に対し説明してくれています。

こういった活動がなぜ起きているか考えると、やはり景観というものは、単にきれいな桜が咲けばそれでいいということではなく、現在この地にある桜がどうして定着したのか、そして今後どうしていけばいいのかということを自然とみんなが意識しての行動ではないかと思っています。景観法の中の「よい景観とは」ということの一つに、地域の自然、文化、歴史、それとそこに暮らす人々の暮らし並びに経済活動、こういったもので醸成されたものが景観である、という文章もあります。

この土手の桜は、飢きんが続いたり不景気が続いたりした中で、堤防工事が行われ、そしてそこに現在の天皇陛下がお生まれになったことを記念して町民がこぞってみんなで植えた桜である。だからこういったものは大事に残さなければいけないという思いだとか、武家屋敷のシダレザクラにしても、江戸時代佐竹の北家という殿様が住み始め、その 2 代目の奥方が京都の公家出身の方で、おこし入れの際に桜の苗木が 3 本入っており、それが今に伝わるものだという話もあります。

恐らく本当のことだと思いますが、真偽のほどは別として、そういったなぜ今これがあるのかという思いが住民に十分伝わることにより、桜を大事にして、景観を維持していく、その行動が、今後も続かなければならないという思いの中で、仙北市としては、今桜に取り組んでいるところです。以上です。

**篠田**：ありがとうございました。

それでは、引き続き、新ひだか町さんよろしくお願いします。

**富田**：皆様こんにちは。北海道新ひだか町です。

当町は、平成 18 年 3 月に、旧静内町と旧三石町が合併し、新ひだか町になりました。二十間道路の桜並木については、静内市街地から約 7km 地点に位置しており、そこから直線で約 7km の並木、桜の本数は約 3000 本です。

今日は、今この桜が抱えている課題と、町としての取組状況等についてお話ししたいと思います。

私どもが考えている課題は 2 点です。一つは、この桜並木が樹齢 90～100 年、老木が多いということで、この維持管理、あるいは保護・保全という面です。もう一つが、観光客の受け入れ態勢、桜祭りのあり方、あるいは活用法等です。

まず 1 点目の老木の状況ですが、平成 14 年に 21 世紀新桜並木造成計画策定プロジェクトという計画を策定しており、この際、木の状況を調査しています。その中では 4 段階に分けておりますが、健全木が 51%しかない、現実的には約半数が手当が必要な状況でした。その調査から 7 年が経過しており、この診断結果を元に、病気等の選定治療に対応している状況です。ただし、本数が多いので、今後とも計画性を持った対策が急がれています。それから毎年定期的に、桜の診断を受け、町民ボランティア等も含めた保護管理に努力しているところです。

2 点目の桜祭りのあり方です。この二十間道路は、競走馬の牧場群に囲まれた特殊な場所です。従って、イベント実施の際、地域への特段の配慮、事故防止等の万全なる管理体制が必要不可欠になっています。毎年、5 月上旬のイベント時期は、競走馬の繁殖シーズンと重なりますので、繁殖牝馬を乗せた馬運車が二十間道路沿線の牧場を訪れておりますが、一方では、観光客が会場に押し寄せるということで、牧場関係者は、大変ナーバスになる時期でもあります。実際に、平成 14 年の桜祭りでは、観光客がペットを放したことで馬が驚き、不幸にして暴走し、事故が起きました。町が損害賠償をしましたが、桁が違うので、非常に気を遣っているところです。従って、イベント会場でも鳴り物等を使用することができていない状況で、見ていただくだけ。若干出店を出していますが、観賞主体になっています。

この二十間道路を会場とすることにより、大変多くの弊害と向き合っており、これらを解決するためには、大きな方針転換が必要と考えております。まちづくり交付金を受け、市街地からの徒歩圏内に桜を植栽し、祭り会場として活用したいということで、今整備をしているところです。二十間道路とは、シャトルバス等でつなぐという形を考えています。できるだけ観光客を市街地に分散させたいという気持ちで、進めている次第です。

**篠田**：ありがとうございました。それでは、富岡町さん、よろしくお願いします。

**小坂**：皆さん、こんにちは。福島県の浜通りに位置します富岡町から参りました。産業振興課長の小坂と申します。よろしくお願いします。

わが富岡町も先人が残された貴重な資源である桜を町の資源とし、町民の皆さんとの協働により、さまざまな振興を図っております。

まず、桜の歴史からご紹介申し上げたいと思いますが、明治 33 年、未開発地区でした町の中心部からやや北側に位置する夜の森地区というところがあります。この地区に、故半谷清寿氏が農地開拓の記念に約 300 本のソメイヨシノを植栽したのが始まりです。後々、地域住民の大きな協力により、現在では約 2500 本の桜並木になりました。

この桜ですが、実は町道の両側に約 2.5km に渡って植栽されており、開花しますと、桜の花で空が見えないくらいの花のトンネルを作ってくれるということが、私どもの一番の自慢です。さらに、開花期間中は数百個のライトアップをし、夜の闇に浮かぶ幻想的な桜も堪能していただけるようにしています。なお、この桜が植栽されている夜の森地区、普段は非常に閑静な住宅地ですが、桜の開花シーズンになると地区の様相が一変します。別世界のような景観を醸しだし、さらに桜の町富岡の名声も上げてくれるということで、町のホームページ、町観光協会のホームページ等において、全国に発信させていただいております。

一方、年間を通じた富岡町の観光イベントの中でも、一番大きなイベントの桜祭りは、4 月の第 2 土日に開催されます。こちらの開催に当たり、実行部隊、いわゆる開催主催者は、町職員を始め地区住民の方、更には地元の中学生、高校生のボランティアの方、関係団体の方、約町民 500 人位の方の協力をいただきながら、官民一体となった連係により、来場者の対応を図っております。

ちなみに今年の来客数は、約 15 万人を数えました。開花時期ばかりではなく、年間を通じ、貴重な資源である桜をキーワードにした事業も、町民の有志によって構成された団体で展開されています。この団体の名称が「桜のとみおか委員会」といいます。こちらの委員会が組織された目的は、地域の活性化、景観を守る、人材育成を図るということで、平成 9 年度に発足しました。さらに、平成 10 年度から 8 年間にわたり、組織の年間事業計画の一つに、桜にまつわる思い出の手紙ということで、桜ぶみ大賞を毎年募集し、全国各地、さらに海外も含め、8 年間で 2 万 1482 通の桜にまつわる思い出の手紙が届きました。平成 18 年度の最終年度に 2 万 1482 通の手紙を音楽家の小室等さん、エッセイストの吉永みち子さんを審査委員にお招きし、入賞作品 363 通を製本し、「桜ぶみ」という本を出版いたしました。本日この冊子を持参しておりますので、後ほどごらんいただきたいと思います。

この委員会独自の活動として、いろいろな事業を展開しておりますが、秋には町内の子どもたちを対象とした、桜の落ち葉を利用した枯れ葉のプール、さらには会員による桜の植栽もしています。桜は結構病気がつくので、その際には、こちらの組織の方々が剪定作業等も実施しています。その際に出ます不要になった枝を利用し、桜染めというような製品も考案・開発しました。この桜染めは、福島県第 6 回福島特産品コンクール、工芸雑貨部門で大賞をいただきました。

この組織の方たちは、桜を保全・保護し、景観を守るという目的を持って、非常に積極的に取り組んでいただいております。われわれ行政としても、富岡町の長期総合計画の施策目標に掲げております交流人口の拡大、こちらの施策に取り組むために、町の貴重な財産である桜の景観の保全・保護を第一に観光からの視点とまちづくりの観点から、桜をキーワードとした新たな施策の振興を現在考えております。こちらを積極的に推進し、取り組んでいきたいと考えております。

**篠田**：ありがとうございました。引き続きまして、日立市さんお願いします。

**佐藤**：茨城県日立市から参りました。市長の代理を務めさせていただきます。

私自身、さくらサミットへの参加は久しぶりなのですが、ちょっと今回寂しい気がしました。というのは、合併によって自治体名が以前と変わっていて、例えば、角館の桜、静内の二十間道路という地名であったわけですが、それが聞けなくなってしまったからです。日立も合併しておりますが、日立は幸いにも名前は変わっておりません。このような機会ですので、ここで、一つだけ覚えていただきたいことがあります。日立という地名ですが、これは日立製作所の工場があって日立という名前がついたのではなくて、先に日立村というのがあって、そこに日立製作所が発祥したのです。企業の方が日立という名称を取ったということですので、それを一つ覚えていただければと思います。

さて、桜ですが、日立と桜は本当に切り離せないものです。日立を語れば、桜を抜きにして語れない。桜を語らなければ、日立の発展を語れないというように、本当に切り離せない関係です。日立では、日立鉱山の煙害によって山が全滅したわけですが、その緑を回復するため煙害に強い大島桜の苗木約 330 万本を植林したことから始まり、その後、企業や市民の手によって、周辺にソメイヨシノを植えられたのが、市街地に咲く日立の桜の始まりです。現在では、学校、公園、企業の工場や社宅、神社仏閣など、市内の至る所で桜

を見ることができます。つまり、今日のテーマでもある景観としての桜ですが、元々日立の桜の始まりは、煙に耐える耐煙木としての桜を植樹したということです。そういう意味では、日立市の歴史と切っても切れない結びつきがあります。煙害を克服した歴史とともに受け継がれてきた､日立市特有の文化とも呼ばれるものであり､日立の桜を見つめ直し、桜を生かし、桜にこだわったまちづくりをしようと、市民と企業、そして行政が一体となり取り組んでいるところです。

具体的には、桜を活用した商品開発、企業や団体を対象とした桜の植え替えをするパートナー事業、環境をテーマとした桜の山づくりなどがあります。また平成 18 年には、日立固有の品種として「日立紅寒桜」が品種登録されましたので、苗木の育成とともに植栽を進めているところです。この桜は、淡い紫がかったピンク色をしており、早咲きで開花期間が長く、1 月末ころから 3 月まで、花を楽しめるという特徴があります。平成 19 年には商標としても登録しましたので、ブランドとして定着させることと、特産等の名称として使用するなど、大いに活用したいと考えております。この日立紅寒桜が 1 月末ころから 3 月、平和通りやかみね公園のソメイヨシノが 4 月初旬、そして日立桜の原点である大島桜は 4 月中旬～下旬、それから大学通りといわれているところがありますが、ここには八重桜があり、そこは 4 月の下旬～5 月上旬に満開を迎えるというように、これらの品種によって開花時期が少しずつ異なりますので、冬場から新緑の時期まで、市内の至る所で、長期間にわたる桜の開花リレーが実現できるものです。この中でもメインになるのが、4 月に日立駅前の平和通りとかみね公園で行われる桜祭りで、国指定文化財であるからくり人形芝居を演じる山車、日立風流物は、まさに荘厳・華麗で見応えのあるものですから、皆様にも是非、ご覧いただきたいと思います。こうした祭りでの誘客は、当然周辺商店街の活性化にもつながるもので、さらなる誘客への努力を重ねていかなければならないと考えております。

本市といたしましても、まちづくりを進める上で多くの課題を抱えておりますが、桜をはじめとした、これらの地域資源を有効に活用することによって、日立を魅力ある街にしたいと思っております。今後とも、皆様と連係して参りたいと思います。

**篠田**：ありがとうございました。次に、北区さんよろしくお願いします。

**飯窪**：こんにちは。東京都北区から参りました、観光振興担当副参事をしております飯窪

と申します。どうぞよろしくお願いします。

北区長の花川は、岩手県釜石市の出身で、今回は同じ東北・仙北市のさくらサミットを楽しみにしておりましたが、明日東京都の都議会議員選挙を控えておりますので、私が代わりに出席させていただきました。

北区は、名前の通り東京の北に位置し、東京の北の玄関口となっております。私は今日、秋田新幹線こまちでこの会場に参りましたが、仙北市の皆さんがこまちで東京にいらっしゃるとき、荒川という大きな川を渡り、一番最初に東京に入るのが、私たちの北区です。

北区の桜を生かした景観としまして、まず初めに江戸時代から観光名所として名高い飛鳥山をご紹介させていただきたいと思います。飛鳥山を桜の名所としたのは、江戸 8 代将軍徳川吉宗です。吉宗が享保の改革で江戸っ子たちの行楽の地をするために、将軍自らが宴席を設け、名所としてアピールしました。江戸時代桜の名所では禁止されていたお酒や仮装を認めたため、飛鳥山は庶民の桜の名所として親しまれ、浮世絵の画材としても度々取り上げられています。現在はソメイヨシノや里桜など、約 650 本が植えられています。

この飛鳥山を生かして、地域の方が実行委員会を作り、「桜 SAKASO 祭り」を開催し、今年で 12 年目になります。飛鳥山は、登山をするような山ではありません。いわば、小高いなだらかな丘のようなところで舞台などもございます。舞台では沖縄のエイサー太鼓の舞や和太鼓の演奏などを披露し、区内外のたくさんの方に喜ばれております。

次は、赤水門の名で親しまれている旧岩淵水門です。先ほどオープニングの合唱で、滝廉太郎の「花」の歌が演奏されました。この曲を聴かせていただき、北区と仙北市がつながっているような感じがしました。というのは、この滝廉太郎の「花」の隅田川にポイントがあります。そして、今移っている赤い建造物が水門です。この水門はかつて荒川と隅田川を分けており、この水門を出発点とし、隅田川が東京湾に流れていたところなのです。この赤水門は大正 10 年に完成したもので、現在は水門としての役割は終えていますが、土木建築物として価値の高いものとして評価され、東京都より歴史的建造物として選定されています。滝廉太郎の「花」の歌に、「春のうららの隅田川　流れを何にたとうべき」という最後のフレーズがありますが、正に、この隅田川の源流の荒川のこの水門の赤い色、土手の緑色、川の水色、そして桜の景観も同様に、何にたとうべきといえるくらいの美しい景観です。ここでも祭りなどが開催されているところです。

最後の写真は、石神井川沿いに咲く桜です。川に沿って遊歩道が整備されており、遊歩道が桜のトンネルとなり、また桜が散るころには、川が花びらで桜色に染まって、見事な

景観となります。桜が咲く時期に合わせ、毎年健康づくりのイベント桜ウオークを開催しております。今年は 2750 人の区民の方が、川沿いの満開の桜を見ながら 6.6km を歩いて、体力づくり・健康づくりを行ってまいりました。石神井川下流付近には、かつて権現の滝や大工の滝があり、滝野川渓谷といわれ名勝地となっておりました。

今私は観光振興を担当しておりますが、観光の視点からまちづくりを進めており、観光マップ、観光ガイドコースを作り、住民の方に観光ボランティアガイドになっていただき、来訪者に区内の観光ポイントを案内していただくということを担当しております。ここで感じたことですが、住民の方というのは、意外と自分の住む地域のいわれだとか由来、あるいは、歴史的な背景ということを知っているようで知らないことが多い、ということでした。観光ボランティアガイドの方と地域を勉強し、いわれや由来を深く知ってくるとみんな「へぇ、そうなんだ」と感動し、何かその建物や場所が特別なものとますます感じるようになり、大切に守っていきたいねと自然に口から出てきます。こういった気持ちが、建物や場所などの景観や、そこにある桜を大切にしてまちに愛着を持って継承されていくことと思っております。ますますの観光ボランティアガイドの活動の輪を広げていきたいと思っております。

**篠田**：ありがとうございました。それでは、吉野町さんよろしくお願いします。

**北岡**：奈良県吉野町から参りました北岡です。どうぞよろしくお願いします。

奈良県吉野町は桜の名所です。ほかの皆さん方のところもきれいな桜の名所ですが、皆さん方と違うのは、公園とか河原とか堤とかではなく、山全体に桜が生えているところです。後で説明いたしますが、桜を見上げるということではなく、桜を見下ろしたり眺めたりという感じの桜であることを一つ頭に入れていただきたいと思います。もう一つは、桜といえばソメイヨシノが出てきますが、あれは江戸時代に作られた桜で、私どものはシロヤマ桜、花よりも先に葉が出てくる桜です。1300 年前からの桜で、町や村の行政体が存在するより遙か前からあるもので、われわれよりも先に桜があったと、それをどうしようかという観点を持っています。

では、簡単に原稿を読ませていただきます。世界遺産、紀伊山地の霊場と参詣道というところにある吉野山は、約 1300 年前に修験道の開祖であった役行者が、蔵王権現の姿を桜の木に刻んだということから桜が御神木となり、信者さんなどにより献木されて数を増

やしました。また、地元の人々により大切に保護されて、現在は、約 3 万本の桜が 50 ヘクタールにわたり群生しております。毎年春には山肌を一面に染め上げ、約 40 万の観光客の方々に感動を与えております。

しかし近年の吉野山の桜は、立ち枯れ被害が目立つようになりました。谷筋を中心にナラタケなどが発生したり、またウメノキゴケに覆い尽くされた木も目立つようになりました。そこで、昨年の春から京都大学大学院教授の森本先生を団長といたします吉野山桜調査チームが、現地調査に入り、樹液の流動や葉や根の状態、ナラタケの発生や土壌、気象などの立地状態を調べ、衰退の根本原因を分析し、対策を考えているところです。気象変動や山や人とのかかわりの変動も危機の背景にあると考えられますが、桜の衰退のメカニズムを解明するとともに、山全体の景観を保つため、地理情報システムなども使った分析を行い、総合的な管理計画を作成していきたいと思っております。

また、この歴史的な自然景観が損なわれてしまうという危機感から、桜の保護育成に官民を挙げて協力いたします、吉野の桜を守る会を設立しました。読売新聞社、NHK、奈良県吉野町が参加しているわけですが、特に読売新聞におかれましては社告を出していただき、最低 3 年、長ければもっともっとやっていかなれければいけないという風に言っていただいております。

フォーラム、コンサートなどのイベントを通し、吉野の桜の現状を広く訴え、調査や管理・保護・育成にかかる費用に充てるため、桜募金を設立し、支援を呼びかけております。おかげさまでスタート以来全国に支援の輪が広がり、寄付金はもちろんですが、心温まるメッセージも次々寄せられております。「桜は日本の象徴です。大切に守らなければ」とか「先日亡くなった母が、吉野の桜の現状を知り募金をしたいといっていたので、それを送ります」とか、吉野の桜への深い思いが綴られておりました。これらのメッセージを受けさまざまな人々にそれぞれの思いと感動を与えてきた吉野山の桜を絶やさず、後世に伝えていくことが私たちの使命であると痛感しております。

そのために、私たち町民が吉野山の桜に愛情を持つこと、身近に当たり前のようにある、桜の景観を大切にする気持ちを盛り上げることが重要だと思っております。私たちの先輩たちが 1300 年もの間絶やさず守り続けてきたこの熱い思いを受け継いで、次世代に引き継いで行かなければならないと思っています。そのきっかけとして、6 月 13 日にサクランボ拾いを行い、町民を中心に約１００名のボランティアの方が参加してくださったり、またそれぞれが種を持ち帰り、1 本でも多くの苗木を育てようとしてくださっています。こ

ういうような取組みの中で、地元の子どもたちが吉野の桜を故郷の誇りとして自信を持っていられるように、また、その子どもたちが次の世代へ引き継いでくれればと思っております。

とにかく、地元のものは余りありがたがってくれませんで、全国から本当にいろいろな思いをいただくのですが、地元の盛り上がりが大変欠けているのを私は非常に危惧しており、こういう盛り上がりを大事に、既に存在している貴重な財産をどう引き継ぎ、どう誇りに思えるか、そのような心の持っていき方をこれから一生懸命やっていかなければいけないなというふうに思っています。ほかの方は分からないですが、例えば吉野山の桜をうちの吉野町の人たちは、きれいなところを余り見たことがないんです。そういうのをもう1度確認しなければいけないなと切実に思っているところです。

**篠田**：ありがとうございました。それでは、大村市さんよろしくお願いします。

**松本**：皆さん、こんにちは。大村市長の松本です。今日は、こうしてさくらサミットに参加できて、大変うれしく思っております。

前回は、一昨年4月に大村で開催させていただきました。今回、特に仙北市とは姉妹都市提携30周年ということで、昨日再調印したところです。仙北市とは141年前からの戊辰の役からのつながりがあり、そういう歴史的背景のある姉妹都市だったのですが、桜でもつながっているということで、桜姉妹といってもいいかと思っております。

ところで、大村市には16世紀に日本で最初のキリシタン大名、大村純忠がおりました。そして天正遣欧少年使節をバチカンに派遣した、そういう町です。花と歴史のまちと言っているのですが、この花の中心は、なんといっても今写真に出ている大村公園玖島城址が中心です。この大村公園は、大村出身であり、わが国近代公園の先駆者として知られる長岡安平が玖島城址に桜を植えたことから始まっています。明治の頃から、桜の名所として有名になりました。特に、大村の特色としては、ソメイヨシノもありますが、なんといっても国指定の天然記念物でありますオオムラザクラです。八重桜の2段咲きで、花弁の数が60～200もある優雅な花で、里桜中の名花と言われているところです。

今日参加している自治体もそうですが、平成2年以来、さくら名所100選に選ばれ、桜中心のまちづくりを特に観光面で行っております。桜のまち大村を広くアピールするため、桜の植栽事業を広く展開し、平成13年度には、さくらの街おおむら推進委員会を設置し、

より一層、さくらのまちの推進に向け取り組んでいるところです。

最近の動きとしては、昨年、平成 20 年の 2 月に、大村市南部にある鈴田地区というところで、地域活性化住民団体、すずたの明日を考える会というのを作られ、すずた千本桜公園植栽事業がありました。これは、地元の小学生をはじめ、地域のボランティア約 600 人のご参加をいただき、ソメイヨシノや大寒桜などの苗木の 800 本の植栽が行われたところです。やはり、地域でボランティアで立ち上がっていただくということが、桜とまちづくりに必要なのではないかと思っております。

なお、今年 3 月の下旬には、国道を 3.7km 拡幅いたしましたが、その折に整備工事中の中、植栽事業として、市役所前の国道 34 号線街路樹の歩道に、ネームプレートを設け、マイツリーという樹木の世話をするボランティア会員の方による桜の植樹を 50 本実施したところです。この事業は、平成 22 年度までに、延長 3km に 300 本の桜の植栽を予定しています。現在、大村市内の桜は、平成 20 年には 1 万 2755 本が確認されております。さくらの街おおむら推進委員会では、平成 34 年までの計画で、総数 1 万 4000 本を目標としているところです。

大村公園から駅前の中心市街地まで桜を植栽し、点を線につなげることで桜を活かした景観とまちづくり事業を進め、将来的には、全地域へと新たな桜の里を広げ、市内外の皆様に桜を楽しんでいただき、桜を中心とした回遊性を持たせた桜のまち大村へ向け、取組を推進しているところです。

花と歴史のまち大村と申しておりますが、今後は、できれば桜のまち大村にできたらいいなと思っております。ちなみに大村には、さくらホールというのがあったり、最近ではおおむら桜ライオンズクラブと、何でも桜で行こうと考えているところです。

**篠田**：ありがとうございました。では最後に、水上村さんよろしくお願いします。

**杉野**：熊本県水上村です。

水上村は昭和 35 年に村の中央部に完成した多目的ダム、市房ダムの周囲、約 14km の付け替え道路の修景事業として、1 万本の桜が植栽されたところです。その後昭和 59 年、当時、熊本県知事であった細川護熙氏の提唱により、熊本日本一づくり運動の中で、水上村は桜を生かした日本一の桜の里づくりに取り組み始めたのがきっかけです。桜以外にも、水上村には熊本県で第 2 の高さを誇る市房山、日本三急流の一つ、球磨川といった豊かな

自然を背景に、美しい花と緑と水に包まれた住みよい村づくりというのが将来像です。桜の管理に関しても、昭和 62 年から、桜への愛着を深めていただこうということで、地元住民総参加の下草刈り作業、ゴミ拾い、缶拾いなどで、桜の保護・育成を図りながら、景観整備を進めているところです。

それから、今年で 38 回目を迎えた桜祭りですが、3 月 28 日と 29 日の 2 日間にわたり開催したところ、約 2 万 8000 人の方に、ご来客いただいております。そういった桜祭りを地域の特性を生かした、地元住民が楽しめる住民参加型の祭りとして更に定着させ、会場、駐車場の整備なども進めながら、さらなる観光面での整備を図っていくことが、今後の課題ではないかと考えているところです。以上です。

**篠田**：ありがとうございました。

いろいろな事例をお話しいただきました。これから様々な視点からフリーディスカッションを進めてまいりますが、まずは「守る」という視点でのお話から進めていければと思います。

先ほど新ひだか町さんから、桜の診断をやっていて、どう対応したらいいかというお話がありました。今私の手元に日本交通公社が出している『観光文化』という冊子がありますが、「日本の心と桜文化」というのが特集されています。よくソメイヨシノは命が短く、せいぜい 70～80 年の寿命ではないかといわれています。ところがこの中に、弘前城の桜について樹木医の小林さんという方が、いやそんなもんではないよというようなことを言っています。弘前城の桜は、ソメイヨシノが結構多いそうですが、なんと 100 年の歴史を経た今も、まだまだ樹勢がいいというようなことが書かれており、実はそれなりの管理をしているからだという話があります。こういう風な知恵を、できたらみんなで共通できたらいいなと思います。古い桜をお持ちの仙北市の石黒市長さん、特に桜の管理などについて、心がけなければいけないことなどがありましたら、お教えいただきたいのですが。

**石黒**：はい。仙北市としては、確かに古い桜を持っておりますが、先ほどご紹介があった弘前市さんからもいろいろご指導をいただきながら、市の組織の中に、桜係という職員を配置し、長年桜を中心に樹木の関係の管理をしてきたところです。

特に桜に関しては、やはり桜が呼吸できない、つまり、根に一番問題があるということで、人がその付近を歩いたことにより、または車が通ったことによって、踏み固められた、

そういった土壌を改良し、呼吸ができるようにするというようなことを長年やってきております。そのために、大学の先生を中心に調査委員会を作り、まずは現状を調査し、それに基づいて樹勢回復の手法・工法をたて、先ほどご紹介しました堤防のソメイヨシノのトンネルについては、4 年にわたり根をいったん掘り、そこに新しい土を入れると同時に、U 字溝を逆さまにかぶせるような形で、多くの人が踏んでも根に圧力がかからないようにするとか､掘り起こしたときに出てきた大きな玉石を木の回りに丸く並べることによって、さらに保護しています。また、シダレザクラに関しても、同じように肥料っ気のある土を盛った方がいいということで、一時期たくさん盛ったことがありましたが、それが結果的には固まりやすい土で、呼吸ができない状態になって樹勢が衰えていたということが分かり、それを取り除くと同時に、先ほどのソメイヨシノと同様、根をいったん裸にして、そこに放射状に U 字溝を逆さまに入れたりということをやって、結果としては、効果が非常に見えてきていると思います。

角館のシダレザクラは、結構葉が散るのが早い木だと、しかも紅葉ということについては、あまり期待のできない木であると、私はずっと思っていたのですが、そうやって処置を施した木が、すべてがすべてではないですが、秋にきれいな紅葉をするまで葉が木に残っていたり、そういったことも効果の一つではないかと思っています。

それと、先ほどお話ししましたように、守るという意味では、お礼肥といいますか、終わった後に、木にまた来年もきれいな花をつけてくださいということで、子どもたちも協力してくれています。そういったことを仙北市としては努力してきました。詳細については、この後の報告の時間の中で、元仙北市の職員であった黒坂さんが、恐らくもう少し詳しいお話をしていただけると思います。

**篠田**：ありがとうございました。

日立市さんは、以前サミットを開催した際にも拝見しましたが、市街地に桜があるという珍しいタイプですね。今の仙北市さんのお話のような、土が踏み固められるというようなことが、市街地ということでは非常に大きな問題としてあるのではないかと思うのですが、いかがですか？

**佐藤**：そうですね。ただ、同じ市街地でも、例えば平和通りについては、やはり日立市としてメインの桜であるし、今のお話のように守っていかなければならないということで、

管理の方をしっかりしています。

一方で、近いところの公園の桜も有名なのですが、ここはあまり管理を徹底していないです。今お話にあったように、根を踏んではだめよというところまで、管理をしていないので、桜の寿命に対してはいい影響を与えていない、そういう桜も確かにございます。

**篠田**：仙北市職員でした黒坂さんは大変な桜の名医でありますので、桜の管理については後ほどお話があるかと思います。

手元資料にある弘前城の桜について見ますと、管理暦というものを作っています。2～11 月にかけて、何月はこれをやるという暦を作って的確にやっています。特に、弘前の場合は、大変驚くことなのですがリンゴの栽培管理法というものを参考にしてやっているということで、弘前方式として全国的に有名であるということが書いてあります。

さて、先ほどお話を聞いていまして、市民団体の力は非常に大きいなと思いました。富岡町さんでは、「桜のとみおか委員会」という委員会を作り、いろいろなことを委員会として活動されているということですが、これをやるためには、それなりにお金がかかるかと思います。この予算の確保というか、財源のねん出はどのようにやっているのでしょうか？

**小坂**：はい。桜のとみおか委員会は、町民の方の有志で、設立当初は 5 名、現在は 25 名の会員がいらっしゃいます。組織された当初は、実は町の観光協会の会員の方がメインとなって、観光協会の会員でない方を勧誘して作られたというような経緯があります。活動するにもお金はかかりますので、観光協会の下部組織に位置づけされ、観光協会の助成で実は運営しています。ちなみに、町観光協会には、町の方、いわゆる行政サイドから、年間事業計画に応じた運営補助金というものが当然支払われます。

**篠田**：同じようなことで、先ほど大村市長さんから発表がありましたが、「鈴田の明日を考える会」という地元ボランティア団体が、大変熱心に取り組んでおられるということでした。同じように会の運営に当たっては、相当のお金が必要でしょうし、あるいは、どのくらいの人数の方が活動されているかなどが分かりましたら、よろしくお願いします。

**松本**：先ほどお話ししました鈴田の明日を考える会というのが、鈴田 1000 本桜植樹祭というのをやりました。この背景には、8 つのブロックくらいに分かれている中の鈴田地区

というところなのですが、私は市長として周辺地域を活性化していくこと、過去においても地域興しといいますか、地域魅力アップ支援事業助成金というのを設定しました。昨年度くらいからまた本格的に、市民プロジェクトというのを作って、地域ごとに年間 50 万、2 カ年で 100 万ほどの予算を組ませ進めております。それくらいのアイデアで、地域興しをやってほしいと。この地域魅力アップ支援事業助成の支援でできたのが、鈴田 1000 本桜公園整備事業です。

先ほど申し上げましたように、昨年植樹祭があったときは、住民のおおかたがすべて集まったような、700 所帯くらいしかないので、600 人というと 1 軒からほとんど 1 人ずつ出てきているような状況で、私も植樹させていただきました。これは平成 19 年度から 27 年度までの 9 年間の事業として、地元のシンボルとなるような 1000 本桜公園建設を目標としております。今回は、ソメイヨシノや大寒桜などの苗木 800 本、1000 本には届いておりませんが、1000 本を目指して、がんばっていただきたいと思っています。ここを一つのモデル、きっかけとして、大村市全体の地域でそういう運動を起こしていただきたい、そういう呼び水になればいいなと思っています。

**篠田**：ありがとうございました。先ほど、これも大村市長さんの話の中で、点から線へ、線から面へということで、市全体を桜の里にして周遊させたいという話がありました。

ここでちょっと参考までに、岐阜県各務原市が、桜回廊都市計画ということを行っています。スクリーンに画像がでていますが、恐らく大村市長さんの頭にあるものも、このような絵柄ではないかと思います。これはぐるりと桜でまちを丸く囲ってしまいます。これが 39km になるそうで、桜回遊都市と銘打っているわけです。あらかじめ得た資料によると、本数としてかなりの数を考えているようです。各務原というと航空関係の会社があるところで有名なのですが、こういう風に、桜で日本一を目指そう、そして桜の回廊をつくろうとお考えなわけです。この絵をご覧になって、大村市長さん何か感想がございますか？

**松本**：いや、すばらしいですね。当市では、点としては、公園を中心として学校だとか、そのほかいろいろな地域に桜を植えるようにしてきていますが、みんなスポット的で、つながっていないんです。私どもは、国道 34 号 3.7km を桜通りにしていこうとしておりますが、これは市街地再開発ということで、74 ヘクタールくらいの中心市街地を考えております。ですから、今見せていただいたこの絵は、まさに私のイメージにぴったりです。市

街地再開発を一回りするような、桜で楽しみながらウォーキングしていただけるような、そういうところを作っていきたいと考えております。

**篠田**：それは、ぐるりと一周回るとなると、どれくらいの距離になりますか？

**松本**：ざっと 4km くらいになろうかと思います。

**篠田**：ありがとうございました。実は、今日は、この各務原の森市長も出席を楽しみにしていらっしゃいました。残念ながらよんどころない事情で来られないということでしたが、こういう構想を立てているということで、ご参考までにご紹介したわけです。

前回の大村市でのさくらサミットで、通年観光ということについても議論しました。桜が咲きますと、春の一時、集中的に観光客が来ますが、それは精々長くて数週間、他の季節はなかなか観光客が期待できないといった悩みを訴え合ったわけです。通年観光ということで、前回、新ひだか町さんから、こんな話をお聞きしました。馬産地であるという利点を生かして、馬のマラソン大会という、ほかでは絶対まねのできないことをやっているということでした。アメリカの西部の郵便配達の歴史から始まったというお話でした。残念ながら僕はまだ見ておりませんが、これはかなりの規模のものなのでしょうか？ご紹介をお願いします。

**富田**：馬を使ったマラソン大会ですが、これは二十間道路を一部利用し、それ以外にも日高山脈に向かって、もっともっと奥に入って林道なども通り、距離が 20km 以上超えるというような形です。ですが、町はこの大会にはかかわっておりません。民間の関係者が実行委員会的なものを作っており、過去 2 回開催されております。ただ、大変距離もあり、馬とのこともあり、なかなかスムーズに行っていないようです。ただそのコースの一部に、二十間道路の桜並木もたまたま使っています。もちろん桜の時期ではないですが、そこもコースに入っているということです。参加人数は、100 人程度だと思います。馬との関係もありますし、大会前に馬をいったん集めなければいけない。大会当日、朝早く始めなければいけませんし、ただ単に馬を連れてきて走る、走るというよりは歩くのですが、そうすると馬房等も用意しなければならないので、今後続けて民間の方もやっていけるのかどうか、それはちょっと微妙だと思います。

**篠田**：実は、前回のサミットで私の方から、馬が緑の草原や牧場を悠々と跳ねている、そんな姿を高台からひたすら眺める、ただそれだけで一つのツーリズムとして成り立つのではないかとご提案しました。私はかつて、ヨーロッパのある島の観光を視察に行ったとき、ドイツからの観光客が日がな一日デッキチェアに座ってのんびりと畑などを見て楽しんでいるということを知って、新ひだか町においては、正にぴったりの観光のあり方ではないかと思ったのです。これは北海道でないとできない芸当ではないかと提案したところ、そういうのも面白いねと前回言っていただいたのですが、如何ですか。

**富田**：町内にロマンロード号といいまして、町の観光施設等を案内するバスを、観光協会で走らせています。そのコースには牧場群も入れて、見ていただいています。ただ、基本的に 4 月の末から 6 月のはじめくらいまでは、ちょうど種付け時期等と重なり、牧場が付近に観光客を立ち入れさせたくないのです。ですから、その時期を外して見せているというところです。

**篠田**：ありがとうございました。

　さて、吉野町さん、世界遺産になったということによって、外国人の目に触れるということが増えているのではないかと思います。外国人の目から見た吉野町への期待とか、何か感じるものはございますか？

**北岡**：ビジットジャパン等で、日本全国に外国人を呼ぼうという話はされています。私ども奈良県では、来年 2010 年が遷都 1300 年祭ということで、知事がヨーロッパに行かれたりということもしています。

　ただその中で、非常に難しいと感じているのは、韓国・中国からの修学旅行のような観光客は、吉野にはあまり興味を持って来てもらえない。今一番興味を持ってこられるのは、フランスの方だったり、何人かの少数の外国人観光客は非常に興味を持って長く 3 泊 4 泊して回られているということがいえます。また、修験道については、日本で唯一、私どものところだけが女人禁制の場所で、そういうことに対する興味のようなものもあるのでしょうし、または、修験道そのもので山に登る修行をしようとか、座禅を組んでみようとか、そういう興味を持たれる方はございます。

**篠田**：ミシュランには、吉野は載っていなかったですか？そうですか。なるほど。

水上村さん、通年観光ということで考えると、グリーンツーリズムを先駆けてやっていらして、その世界では水上村は大変な先輩格ではないかと思うのですが、最近の状況をご報告いただけますか。

**杉野**：はい。早々に、水上村は水上ツーリズムとして取り組んできたわけですが、最近では全国的に各市町村でもそのような取組みが始まりまして、観光客が分散し、入り込み客数が横ばいになっているという状況にあります。

そこで、先ほども申し上げましたが、熊本県第 2 の高さを誇る市房山がわが村にはございまして、そこの市房杉の魅力をどうにかして、観光客の誘客に使えないかということで、トレッキングツアーというのを考えました。地元の方々、有志 15 名が屋久杉で有名な屋久島に行かれ、ツアーガイドの勉強をなさったり、消防署員による AED などの講習も受けて、緊急の時には即時に対応できるような体制を取って、今回、初めて 5 月 31 日に開催いたしました。そうしたところ、予想以上に問い合わせ等の反響が大きく、市房杉への皆さんの関心の高さが伺えたイベントでした。

市房杉と申しましても、樹齢が 800～1000 年といわれ、大きいものでは幹周りが 7～8m、樹高が 40～50mほどの杉が、4 合目の市房神社の参道沿いに 50 本ほどあるものですから、これを癒しの空間ということで、来ていただいた皆さんに少しでも癒しの気持ちを持って帰っていただければということで、取り組みました。

それと併せて、心理セラピーという言葉を皆さんも聞かれたことがあると思います。ただいま宮崎県、鹿児島県、福岡県には、セラピー基地の認定がありますが、熊本県内ではまだありません。昨年 8 月から申請を行い、今年 8 月には実験の段階に移って、来年の 4 月に熊本県で第 1 号の認定基地を受けようということで、今取り組んでおります。

**篠田**：ありがとうございました。

今日は東京のど真ん中、北区からも来ていただいております。実は、下町の玉三郎、梅沢富美男さんの劇場が北区にあり、先ほどちょっと控室でこういうことをやったら如何ですかという話をしておりました。確かに北区は、吉宗の桜で有名ですし、渋沢栄一さんのゆかりの地であったり、近代日本を作ってきた場所でもあるわけですが、一方で、下町の

文化をうまく生かすようなことが、あってもいいのではないでしょうか。

**飯窪**：ちょうど今、観光コースを作っているところなのですが、飛鳥山の花というだけでは、そこで終わってしまいます。やっぱり花と団子とあるように、食が大切なのかなということで、そこをつなげなければいけないというのが、一つのポイントになっています。

下町というお話をされましたが、十条商店街というのが、飛鳥山の近くにあります。そこを何とか、飛鳥山からガイドコースとしてつなげて、下町の雰囲気を味わいながら、食も体験していただく。そのようなガイドコース作りができればいいなということで、今観光ボランティアの方と、コース作りについて検討しているところです。

**篠田**：私は、ぜひとも下町の劇場で、桜のシーズンには必ず桜にまつわるお芝居などをやっていただいたら、これは集客にもなるし面白いのではないかという提案をしておりました。

と話しているうちに、まもなく時間になってしまいますが、開催地でございます仙北市の石黒市長さん、どうしてもこれは言っておかなければということがありましたら、どうぞ。

**石黒**：仙北市としては、やはり桜の時期のみならず、いわゆる通年観光として、桜を中心にどうやって広げていくかということで、例えば、桜が終わった後の新緑についても当町の観光協会も数年前から、「緑降る角館」というキャッチフレーズで、正にシダレザクラの緑などは、町中を歩くと緑が降ってくるというような雰囲気ですし、堤防の花のトンネルについても、朝歩くと、非常にすがすがしい気分の中で、川を眺めながら気分が一新できる。そういったところも花だけでなく桜ということの中で大いに展開していけるのではないかと思います。当然、先ほども申し上げましたが、木に勢いがつくことにより、紅葉も昔よりさらに楽しめるようになっていくのではないかと思っていますし、枝に雪がかかった、これを雪桜と命名し、これも JR 中心にいろいろ呼びかけたりしています。このように、通年花の咲く時期だけでない、桜の展開をやっていきたいと思っております。

もう一つは、従来からの二つのポイントのみならず、合併した仙北市の中で他の地域、田沢湖高原の方にも湖畔にも桜はありますので、そういったところは、手入れが十分でないが故に、余り名所的な知名度が出ていないわけです。仙北市は 1090 数平方 km ある非

常に広い市です。山もあります。角館の桜が終わっても温度差の関係で、1 週間から 10 日ずれて咲く地域が、仙北市にはたくさんあるわけです。ですから、これを整備することにより、日にちをずらして楽しんでいける桜の名所にもしていきたいと思っています。

**篠田**：ありがとうございました。時間となってしまいましたが、冒頭に石黒市長さんの方から、景観の定義が法律に書いてあるというお話がありました。景観というものは、単に自然だけではなく、文化や歴史、あるいは暮らし、経済活動のようなものをトータルとして考えていかなければいけないという話でした。

歴史ということになりますと、今日は非常に深い歴史を持った自治体にご参加いただきました。また、住民が桜を愛する気持ちを持たなければいけないということについては、吉野町さんの方では若干その点が足りないというお話もありましたが、前回木次町の後身である雲南市の市長さんが、「美しい桜を咲かせようとする、そういう努力がもてなしの心を生む。そして、もてなしの心が桜をさらに美しくしていく。そうすると、桜の時期ではないときもそのまちに行ってみたいと思ってもらえる」というようなことを言っておられました。

今日は、「さくら・景観」というテーマで話し合いましたが、是非とも、単に自然だけではなく、文化、歴史、暮らし、住民の気持ち、そのようなものを盛り込んで、さらに美しい景観を後世に伝えていければ幸いだなと思います。

それから、いかに桜の命を長らえるようにするかについては、この後、黒坂さんの方からお話がありますので、ご静聴いただければと思います。

以上をもちまして、ディスカッションを終えたいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

■報告

「文化財としての桜を引き継ぐ」

樹木医　　黒坂　登　氏

皆さん、こんにちは。この 3 月末まで、ここ仙北市教育委員会で桜の保護管理を担当してきました黒坂と申します。今日は、「文化財としての桜を引き継ぐ」ということで、報告の機会を得まして、大変ありがたく思っております。早速、始めさせていただきます。

（以下パワーポイントのスライドを提示して報告）

こちらの写真は、古城山から見た角館の全景です。この辺が武家屋敷、これが桧木内川の堤です。平成 9 年には秋田新幹線が開通し、年間 230 万人くらいのお客様にお出で頂いております。その内、桜の期間中は、今年ですと 126 万人になります。

角館地区には、国の重要伝統的建造物群保存地区、いわゆる武家屋敷が残っています。380 年ほど前に、芦名氏によりそれまで古城山北麗にあった屋敷群を新たに南麗の現在地に移転し、まちづくりされた武家屋敷が今も残っており、桜の開花時にはシダレザクラと共に伝統的景観が見られます。こちらの白黒の写真は昭和 32 年頃の武家屋敷で、道路がこの当時と比べて非常に高くなっており、恐らく 30～40cm ほど高くなっていると思われます。これが、後に桜の保存に影響してくることになります。

角館には桜が 2 種類あります。一つが角館のシダレザクラで、こちらは国指定の天然記念物です。それから町の真ん中を流れる桧木内川、こちらの左岸にはソメイヨシノの 2 キロの桜堤があり、国の名勝に指定されています。全国でも、ソメイヨシノが国指定になっているところは珍しいのではないかと思います。平成 2 年には、財団法人日本さくらの会の「さくら名所 100 選」にも選ばれております。

天然記念物の角館のシダレザクラの歴史ですが、先ほど申し上げましたように、武家屋敷を作られた芦名公ですが、51 年間で断絶され、後に佐竹北家義隣公が代って治めたわけです。その義隣公という方は京都の公卿の出身でした、2 代目のお嫁さんも京都から嫁いで来られました。そうしたことから京文化と共にシダレザクラの苗木も持ち込まれ、家臣の庭で殖やされたのが、角館のシダレザクラの起源とされています。

明治 33 年、西暦 1900 年に町人町の外町から出火、武家屋敷の半分を焼失する大火があり、シダレザクラも殆どが焼失してしまいました。火災前の貴重な写真があります。この

写真は陶家に伝わるものです。また、江戸後期の寺子屋の教科書「鳥帽子於也」には、「両側に並ぶ糸桜・火除の土手の糸柳」の記述があります。火除とは、現在市役所角館庁舎があるところの広場で、武家町の内町と町人町の外町を隔てる防火帯です。当時から武家屋敷の両側に糸桜（シダレザクラ）があり、火除の土手には糸柳（シダレ柳）があったことを物語っております。さらに明治初期、武家屋敷の春を描いた絵画も残っています。

一方、桧木内川堤ですが、こちらは昭和 6 年に冷害があり、救農土木事業で堤防の築堤に着手しました。隣接の原野から人力で腐食質に富んだ土を運び堤防を築堤しました、昭和 8 年に完成しました。この年の 12 月 23 日に皇太子殿下、つまり現天皇陛下がお誕生になられ、皇太子殿下誕生と堤防の完成を祝い、翌 9 年春に町民総出でソメイヨシノを植栽しました。戦後幾多の混乱がありましたが、土壌的にも恵まれ、町民に守られて生長し、今では壮観な桜並木になっています。

しかし、昭和 47 年に桧木内川が氾濫する大水害がありました。その後、河川災害復興事業で川幅を 2 倍に広げ、河床も 1.5m ほど下げ、さらに堤防を補強しました。こちらが昭和 46 年河川改修前の堤防の写真です。堤防補強のため大体 60～80cm くらい盛土をしました。これが後に桜の生育に影響するわけです。堤防機能と桜の生育環境の両立は難しいところがあります。

角館の桜は、全国的に知られるようになり、多くの観光客が訪れるようになりました。お客様が多くなると、他の桜の名所と比較されることもあって、通常の文化財を大切に守る以外に、観光客に、他と劣らない花数の多い豪華な桜を見ていただきたいと思うわけです。そのためには、より踏み込んで、悪化した生育環境を改善すること、それと日常の管理の徹底といったものが求められるわけです。

良い花にしようとしての、土壌改良等の生育環境改善は文化財保護法上の現状変更はもちろんですが手順を踏まなければいけないということです。そのためには、まずは専門家等からなる委員会を立ち上げ協議・検討しながら、現況を詳細に調査分析、保存管理計画策定。そしていよいよ計画に従って保存工事に着手するわけです。工事が終われば、その内容をまとめた工事報告書を作成します。その後、保存の効果を検証するモニタリングも大切です。

一般に指定物件というのは貴重なので手を触れてはいけないと思われがちですが、実は

手をかけていかないと、指定時の良好な状態が失われてしまいます。ただ、文化財はたくさんの種類があり、画一的に保存方法が決められず、指定物件ごとに保存管理計画を策定し、保存管理するわけです。桜もそうですが、人間の影響下で成立したものですから、いつまでも手をかけていかなければ、良好な状態を維持できないということがあろうかと思います。角館の桜はどちらも国指定物件で、さらに群指定で数が多く、広く分布しており、それぞれ生育環境も異なり、単木の指定とは違った困難があります。

こちらは桧木内川堤の保存前状況です。こういった堤防の補強による盛土とか、幹の腐朽や、長年の踏み固めが見られます。もちろん枯れたところもありました。一般にいわれるソメイヨシノの寿命というのは、根の病気が原因で枯れてくることが分かってきています。しかし掘って根を露出しないと分からないわけです。この病気により何も手をかけなければ、大体 60 年くらいで枯れてくる。いわゆるソメイヨシノ 60 年寿命論は、ここから来ているわけです。こういったような大きながん腫病（コブ）がついているわけです。これは切って除去し治療します。

こちらが堤の写真です。生育状況調査・分析し、保存管理計画を策定、報告書を作成しました。そして、平成 12～15 年度まで 4 年間かけて、保存修理工事を実施しています。

桧木内川堤保存事業により生育調査をしたところ、活力低下は、堤防補強の盛土や栄養不足、長年人や車の踏み固めなどが原因と分かりました。普通は伐倒して植え替えが考えられますが、この堤では委員会で検討の結果、その一般的方法ではなく、生育環境を改善し自根による更新図ることにしました。どのような方法をとったかというと、桜の根の周りを深さ４0cm、半径 1m の範囲で根を傷めないように手掘りします。これは機械で掘ると根を大きく損傷してしまうのでだめです。そして改良した良い土に入れ替えるわけです。ソメイヨシノはわり合い強いところがあります。堤防補強の盛土により、昔の根はずっと下の方にあるのですが、地際に新しい根を出してきます。生きようと懸命にがんばっているようでした。これをうまく支えることで桜は蘇ってきます。

先ほど市長も申しましたとおり、踏まれても根を張るようにということで、U 字溝を逆さまにして入れたり、根に空気を通すため、パーライトという改良材を使ったりといずれも新しい根を伸ばす目的で併せて、黒土や堆肥等を配合した改良土を入れます。そのあと工事によって出てきた玉石を幹の周りの土壌改良をしたところに置いて再度踏み固められないようにしています。こういった保存修理工事を 4 年間実施しました。

シダレザクラの保存前の状況ですが、このように多数の樹木が生長して日当たりが悪くなっていました。また車が普及してきてからは、根の周りが車に踏まれ、踏み固められるようになりました。武家屋敷通りの道路が高くなりまして、当然屋敷の方が低くなりますので、不便なために屋敷全体や桜の周りに土を盛ってしまいました。それと、観光客が増えたものですから、観光基盤の整備のためや住宅への出入りのため舗装されてしまました。武家屋敷は樹木がたくさんあって良いのですが、桜にとっては日当たりが悪くなります。樹木は毎年生長して大きくなっていきますので、だんだん日当たりが悪くなって、やがては衰退してくるということです。

調査結果の概要ですが、日当たりが悪くなって木は高くなったものの、直径の増加が少なく生長が悪い傾向があった。さらに日当たりが悪くなると花の量も、枝垂れ具合も少なくなる傾向がありました。日当たりが、開花状況に影響するということが調査結果から明かになりました。日当たりは大切だということです。

したがって、日当たりを改善し、根の周りの土壌状態を改善する必要があるわけです。各屋敷の庭木ですので、特徴は、1 本 1 本の生育環境が違います。保存工事は生育環境に合わせて 6 種類のメニューを組合せ、工事をしています。6 年間で 147 本を施工しました。

シダレザクラの方も、基本的には堤と同様、手堀りで掘って、土壌を改良土に入れ替えています。それから、こういった出入り口で舗装されているようなところは、いったん舗装を壊し、掘り返し、U 字溝を逆さまに入れて、根を張れるように改良しています。また新たに開口部を設け水と空気も入るようにしています。

桜を引き継いで行くには、要は日当たりの確保、通気性や水はけが良く有機質を含む柔らかな土壌、これが必須です。そのほかに日常の管理としては、ソメイヨシノの場合は、テングス病枝、枯れ枝の除去、それから継続して肥料を与えるなどの日常管理が必ず必要です。一番作業量の多いのは、早春のせん定作業です。枝の末端まで安全に作業するため高所作業車を使います。

それから枝を切る場合切る位置に注意が必要です。腐朽を防ぎ癒合組織が巻き込み、切り口を覆うため、幹に沿って切るということが大切です。また、切り残し枝を残さないことも大切です。作業上のポイントですが、枯れたところを切っても意味がなく、もう少し切りつめて生きたところを出さないと、傷口を癒合することはできません。

それから施肥ですが、人が植栽した桜というのは、大体が栄養不足で、毎年少しずつでも肥料をやります。一番大変なのは、野鳥ウソの食害です。今年はウソ激しい食害があり管理しているソメイヨシノ以外はほとんど花がつきませんでした。写真はウソが蕾を食べているところです。経験上ですが 12～1 月の平均気温が高ければ、巡回するなどして飛来を警戒しなければと思っています。

保存工事をした桜は、胴吹き枝がたくさん出てきています。なるべく下から出た、新しい枝 3 本を選んで次の幹に仕立てるよう育てています。この他、伸びた不定根や、ヒコバエも育てています。これらの方法は植え替えせずに花を見ながら桜を若返らせ、更新していくというのが、私たちの方針で着々と実行されつつあります。これが、胴吹きの枝から、花が咲いている様子です。これは 12 年くらい前の同じ桜ですが、現在はこのように新しい枝がたくさん出て太くなり、枝が若い分、花の量も多くなっています。根の方は、このように細い根がいっぱい出ています。

こちらは、先ほど見ていただいたシダレザクラです。まだ工事後間もないのですが、日当たりや土壌が改善されたので枝も伸び、花の数も増えてきているところです。

文化財の活用ということでは、たくさんの人に見ていただいています。開花が５月の連休にかかると、140 万人以上のお客様にお出で頂いておりますが、最近は温暖化の影響でしょうか、開化前に暖かい日が続くものですから、早く咲いて、４月中に散ってしまう傾向にあります。

先人たちの努力のお陰で、たくさんの桜を残こして頂き武家屋敷との一体的な歴史的景観を呈しています。しかし、保存上予想外の問題も出てきますが、それを桜の保存と両立するよう一つずつ丁寧に解決しながら、大切に守って引き継いで行くことが責務と思っています。

桜の開花期間は 1 年の中では僅かですが、手を尽くすと、相応に応えてくれるということが分かりました。これが手をかけてうれしいところで、苦労があっても報われるところです。

本日は、ご清聴いただきまして、本当にありがとうございました。（拍手）

**■記念講演**

**「ふるさとのけしき」**

**作家　　塩野　米松　氏**

ご紹介いただきました、塩野米松です。よろしくお願いします。

今日のテーマは「ふるさとのけしき」ということですが、僕は秋田県角館町で生まれて18歳まで角館で過ごしました。今日お話しするふるさとというのは、角館のことです。僕は角館で生まれましたが、僕の家は代々角館なわけではなくて、父と母が疎開して角館に来ました。僕は角館で昭和22年1月1日に生まれました。親たちは、米の国に来て松の日に生まれたので、米松という名前をつけてくれました。あの当時は食糧難だったので、どうしても秋田県角館といえば、米だったのだと思うんです。もし今のような豊かな時代ならば、米ではなく、もしかしたら桜だったかもしれない。それで僕の名前は塩野桜松とかという名前をつけてしまったのかもしれないのですが、ずっとこの親からもらった塩野米松という名前で、作家を続けています。

先ほど紹介がありましたが、自分の作品の半分以上は、舞台が角館かこの地域です。背景になる舞台もほとんどが、現代の角館ではありませんが、ある時代の角館を模して舞台を作っています。その中に登場する子どもたちも大人たちも、しゃべる言葉のほとんどは方言です。この角館町という場所を舞台として物語を書こうとすると、なかなか標準語というのは難しいです。どうしても言葉と背景は重なり合って、作品の味を醸し出すと思いますので、自分はずっと方言を使ってやってきました。

物語の中には、たくさんの風景を散りばめます。それはどうしても、周りの風景だったり、四季さまざまの変化だったり、小さな物事を克明に書くのが僕の作品の特徴でもあります。田沢湖の水面の一つひとつの佐々波の輝きだとか、子どもたちが魚を釣って逃がしたときに見える振り仰いだ空の様子だとか、そこには必ず周りに入っている風景や遠くの山の頂の様子を書きます。友達に意地悪をされて、森の中に置かれてきた子どもたちの悲しみの様子を書くときも、必ず森の中の木々の話や、そこに生えている一輪の花のことを必ず自分は書き添えていると思います。

自分の作品の背景には、ふるさとなくしてあり得ないという部分があります。これは僕だけではなく、ほとんどの作家がそうだろうと思います。僕はたくさんの作品の作家たち

のふるさとを訪ね、世界中を旅しました。それは、作品を読んだのとはまた違って、行けばわかるという風景があるからです。それは、そこにある空だったり水だったり木々だったり、植物、花や風の薫り･･･。そうしたものが読んだ後に、その風景を訪ねると再現されてくる。そしておもしろさが倍以上になる。その様子を訪ねていくと、やっぱり作家にとって、ふるさとというのはとても大事なもので、そこからものが生まれてきているんだろうなというのを痛感します。

室生犀星は「ふるさとは遠くにありて思うもの」といいました。ふるさとから遠く離れていても、やっぱり思うものには間違いないのです。ふるさとは、やはり作家にとってはずっと大事なものであり、思うものであると思います。

これは僕たちのような仕事をするものに限らず、他の方々も皆同じだと思うのです。四季の変化というのは、それぞれの職人たちの仕事にも必ず影響します。かつての職人たちの仕事の素材は、必ず自分の近くのものでした。近くのものを使って、自分たちの技で作り上げる。近くのものというのは、近所の野山に生えているものでした。秋田県角館には、モウソウ竹も淡竹も竹がありません。基本的にざるなどは、下りものといって東京方面から来るものか、近くの根曲がり竹か、篠竹で細工したものを使っていました。篠竹というのは、積雪量が 60～70cm 以下の地方に生える竹を言います。それ以上のものになりますと、チシマザサといわれる根曲がり竹を使います。角館の方は、根曲がり竹の地域ですので、雪で根本の曲がった竹を 4 つに裂いてかごを作ります。岩手県の方に行くと、積雪量が少ないので、篠竹を使います。同じようなかご、同じような材料ですが、粘りやコシが違います。そうした性質の違いは、そうした材料を使い、そうしたもので作られた道具を使って生活する人たちの中にも、わずかずつ違いが出てくるのです。

このように道具というもの、もしくは職人の仕事にしても、皆、自分のふるさと、生まれ育った場所が影響しています。角館の南の方に、アケビ細工でかごを作る人たちがいます。この人たちの仕事を見ますと、全く四季とふるさとに影響されています。アケビのつるというのは、木に絡むつるではなくて、地面を這う方のつるを使います。木に絡む方は癖が多くて、かごを編んだりするのは不向きなのです。地面に這うつるを採集し、それで 1 年間ずっと編み続けます。その採集の期限が、必ず仲間内で決まっています。必ず夏の土用の後からなのです。夏の間はまだまだ伸びます。夏の間に切ったものは、刈ってから縮んだりカビが生えたりします。ですから、採集人たちはできるだけ秋近くに採ります。

採集日の後ろは決まっていないのです。これは、雪が降ってどうしても取れなくなるからです。ですから、アケビ細工の人たちの中にも、この風土と四季が織り込まれた仕事が成り立っています。職人の仕事というのは、やはりふるさと、それからその人たちの風土と大きく関係しているわけです。

僕は長いこと職人さんの間を訪ね歩き、聞き書きの仕事をしてきました。一番最初にその仕事をしたのは、法隆寺の棟梁でありました西岡常一さんのところでした。西岡さんは、法隆寺を 1400 年前の法隆寺をそのままの形で守ってきた大事な棟梁でした。彼の話の中には、確かにこの話は日本人だから分かるだろうと思われるものがたくさんありました。日本の国にヒノキという木があったから、この建物が持っているのだと。1000 年以上のヒノキを切り倒したからには、1000 年以上の建物を造らなければ、自分たちは勤めを果たしたとはいえない。木にはみんな癖がある。南の斜面に生えた木には南の癖があり、北の斜面の木には北の癖がある。森の真ん中で育ったものと周りで育ったものには、それぞれ違う癖がある。この癖をいかに生かして使うかが、この法隆寺を 1000 年持たせてきた理由なんだ。それで僕は、なるほど、日本人の木を扱う職人たちは、大したものだと思いました。

同じように職人たちの技の伝統だとか、教育方法、物作りのことを調べるために、あちこちの国の職人さんに会いました。ビールの樽を作る職人さんにあったとき、非常に驚いたことがありました。イギリスは樫の木でビールの樽を作ります。ビールの樽は、ウイスキーのように造った酒を寝かしておくものではなく、樽をそのまま馬車に積み、それをけ跳ばして馬車から降ろします。そして、イギリスのバーの地下にある倉庫に、それを転がり落とします。それにホースをつけて、1 階にあるバーのカウンターからビールが出てくるようになっています。ですから、非常に丈夫な樽を造らなければ、樽は壊れてしまうのです。イギリスは樫の木がなくなりました。森を切り尽くし、ほとんど今は保存状態のいい部分だけ、天然記念物など切り倒さないものとして残っています。ですからあの国では、今ビールの樽を作るための樫をよその国から買わなければなりません。しかし、職人さんたちはまだ 7〜8 人残っておりまして、その内の 1 人の方にお会いしました。その話を聞いていたとき、西岡棟梁と全く同じことを言うのです。自分たちが使っている樫の木は 150 年くらいの樫の木だ。この樫の木を切り倒してたるを作るからには、自分たちは最初の樽を 80〜90 年くらい持つように丈夫に造る。ただの丈夫さではない、馬車から投げおろし

ても転ばしても壊れないように造るのだ。これで 80 年くらい持たせる。そしてもう一度その板を解体し、もう一回り小さいたるを作る。それで 50 年くらい持たせる。そうすると 130〜140 年くらい持たせることができる。その小さな樽を解体した後は、園芸用などの作品を作って寿命を全うさせるのだ。その話を聞きますと、職人というのはやっぱり同じようにものを考えるのだと、自分たちが使わなければいけない素材をなくさないように、最大の工夫をしているんだというふうに思います。

それから、物作りの方法にしても、修業の方法にしても、西岡棟梁たちが宮大工を育てていたやり方と、イギリスの樽職人たちと、ほとんど変わりがありません。親方のところに弟子入りし、修業を積みます。そのときには、日本のような住み込みというのはありませんが、基本的には親方のもとでみっちり仕込まれます。その次に試験があります。それで合格しますと職人として扱われます。その後に、ジャーニーマン、旅をする人という呼び方をしていますが、よその職人のところに一度学びに行き、それから初めて一人前の給料をもらって働くようになる。そのときには、弟子を取らない限りマスターとは呼ばれない。弟子を取って初めてマスターであり、自分の教わった技を他人に受け継ぐことによって、初めて一人前の親方と認められる。その親方たちが伝える内容は、西岡棟梁も伝えていた木の扱い方。それから自分たちが職人として、自分に言い聞かせている棟梁というものは、100 人なら 100 人の職人を使わなければいけない。そのものたちのすべての癖を生かして初めて建物ができる。その器のないものは、自ら去らなければならない。棟梁の役割は飾りではない。すべてを統一し、ある方向に持っていくからこそ自分の役目があるんだ。同じことをイギリスのビール樽職人たちも言うのです。

それを見ますと物作りの中には、同じものの考え方がある。それは、日本人だから考えてきた物作りの考え方ではない。世界中どこでも、物を作ろうとすれば、職人たちは一生懸命にやります。自分の腕を磨きます。他人に負けないようにしたい。そのためには、いかに素材を生かすか、道具を研ぎあげるか、そうしたことは、やはり同じように心構えを配った人間を育てます。ですからそうやってみますと、日本人特有の物作り、それから、イギリスだから、ドイツだから、フランスだから、中国人だからという物の作り方の国の差はないのです。いかに真剣に物作りに取り組んでいるか、それともいい加減なのかという差は表に出ますが、国の差はほとんどないと思います。

ただ、そうやって世界中の物作りを見て、作り上げた品物を見たときに、僕は明らかに

日本の品物は違うと思うのです。それは何が違うかというと、日本という風土、四季、素材、そうした物をいかに生かすかというとき、自分たちの背景にある風土をいかに生かしてきたか。それから、風土の中から汲み上げた感性というものが、よその国とは違うと思うのです。そうしたさまざまな宝物、日本の国宝、それには至らない伝統工芸展に並ぶ品々を見ても、それを痛切に感じます。その背景にあるのは、実は風土であり、それぞれの人のふるさとなのではないかという風に思います。僕自身の作品の中にも、僕が得た自分の感性というのは、風土が育ててくれた物だと思います。春や夏や秋や冬、さまざまな季節の変化、そこで出てくる空の色の輝きや草の色、芽生え時の美しさ、そうしたものは、頭の中に残ります。こうした印象的な風景があるからこそ、自分の作品の中に反映していけるわけです。

そうしたときに、イギリスの風土と日本はやっぱり違うのです。そうした違いを見ているときに、作品の中にそれらが明らかに現れてくる。ですから物作りの背景にあるのは、職人たちのものの考え方・姿勢はそんなに変わる物ではない。ただ作品そのものは、それぞれ違う。同じように、私たちのようにブナの木がある森林帯で育った人たちと、西の樫の木や照葉樹で育った人たちでは、山の風景に対して全然違った感覚を持っています。僕はどんなに忙しく世界中を旅していても、桜の後の山が萌え出すときの角館に、ぜひいたい。これは世界中どこにもない美しさで、この柔らかさは日本の中でも西の人たちは知らない美しさだと思う。いつかこうした美しさを自分の作品の中に表したいと思います。世界中の職人さん、表現者たちは同じように考えていると思うのです。自分たちが砂漠の中で沈んでいく夕焼けを見る。その夕焼けの中に現れるらくだのシルエットを誰かに話したい。もしくはそれを作品に表したい。そう思って生み出す作品と、僕たちがブナの柔らかな緑色の中に舞う蝶の姿を現したいと思うこと、これは明らかに違うのです。それは感性の違いでもあるのです。そして、この感性を育ててくれているのは、明らかにふるさとの景色だと思うのです。

ということは、僕たちはふるさとの景色の中から、感性を磨くという作業をしてもらっているわけです。テーマの違いとか色の違いは、明らかに違うものです。日本画が生まれたのは、日本の景色があるからです。日本の景色が生み出した、育ててくれた感性が画家の中に、詩人たちの中にあるのです。それを生かすことが自分たちの技術であり、画家や詩人たちの技の育成なのです。同じように西洋の画家たちは、洋画という方法と素材を考え出したと思うのです。それは、西洋の風景や空の色、海の色を表すのに、たぶんあの画

材が必要だった、あの方法が必要だった、そのように思います。

先ほども角館の話がありました。武家屋敷の写真を見せていただきました。僕は、あのようなものを見たときに思うのですが、景色はできあがってくるものではなくて、実は人間たちが作っているものだと思うのです。2 週間前まで、イギリスの田舎をずっと旅していました。イギリスの田舎というのは、実にきれいにできています。石垣と生け垣で囲まれ、中はみんな牧草地帯で、美しい花が一面に生え、緩やかな丘がずっと続いています。見事な風景だと思います。しかしこれは、昔からあったものではないのです。イギリスに囲い込み法という法律ができました。それは自分たちの土地をきちんと囲って、自分たちの土地を自分たちで管理するようにという法律です。そして、一生懸命に自分の土地を耕し、きれいに作り上げました。それが 250〜300 年たたない間にできている。今のイギリスの風景は、イギリスの人たちが作り出した風景です。その中をずっと車で走っているとき、さまざまな音楽をかけます。そうすると、やはりクラッシックが似合うのです。クラッシックというものは、たぶん、ああした風景や背景の中から生まれてきたのだろうと、つくづく思いました。4〜5 日前に角館に戻ってきました。山に遊びに行きました。そのときにも車で走って周りの風景を見ます。そうすると、やっぱり民謡だなと思うのです。民謡を生み出しているのは、やはり風景なのです。景色なのです。

その風景というのは、角館近辺の風景にしても山々にしても、勝手にできたものではないのです。やっぱり自分たちの風土の中で生きていくために一番良い方法、かつ自分たちが気持ちの良い方法を考えながら、あの風景を作り出したと思うのです。長い時間をかけて作り出した風景の中で、僕たちは育っているのです。

僕たちは風景の中から、さまざまな感性を受けます。それから考え方を育てられます。美しさの基準を学びます。しかしその美しさの基準になる風景を生み出したのは、もしかしたら僕たちの先祖であり祖先たち。それをはぐくみ育ててきたのが現代人だと思うのです。僕は角館を誇りに思いながら、友達が来れば武家屋敷に連れて行きます。そのときには、ちょっと自慢の顔があります。僕が昭和 40 年に東京に行ったとき、角館は誰も知りませんでした。まだ生保内線があり、終点が今の田沢湖、昔の生保内でした。こうした駅を知っている人たちもいなかった。そのとき友達を角館に連れてきても、僕はあまり自信がなくて、田舎だけど遊んでいってよといいました。裏の川に行けばイワナが捕れる、カ

ジカも捕れるよと。それは皆驚いてくれるのですが、風景そのものを驚いてくれたかどうか、僕は自信がなかった。今になると、角館出身だと、遊びに来いよということを堂々と言える。それは、角館の町が知られたからというのもありますが、これがほかの国やほかの町にはない、すばらしいものだからだと思うからです。

感性と時代が街を作ってきたのだとすれば、実は私たちは、私たちの祖先に育てられていることになります。景色はしかし、今の武家屋敷の話ではないですが、僕たちは観光のためにあの街を武家屋敷を造ったわけではないのだと思うのです。あれは、武家屋敷という存在があり、かつあれを維持する人たちがいた。観光のために役に立つようになったのは、ずっと後です。もし景色や風景といったものを作って、人を呼ぼうとしたなら、僕たちは大事なことを考えなければいけないと思います。僕たちは、景色を今なら作ることができます。これだけ重機が開発され技術が発達すれば、もしかしたら思いのままに作ることができるかもしれない。

ちょっと庭師の話をしますが、自分の家の庭を造りたいと庭師に頼みます。注文をいいます。梅の木がほしい、池がほしい、築山がほしい、向こうにある山並みを借景にしてこういうものを作ってほしい。庭師は注文に応え、たぶん立派な庭を造ってくれると思います。しかし立派な庭師なら必ずこのように付け加えます。ここから先、この庭を維持するのはあなたです。あなたが養生し、育てて、この庭ができあがります。今作り上げた庭がもし完成品で、これから落ちていくのだとすれば、あなたは庭の持ち主としての資格がない。庭を造るということは財力も必要だ。庭を造るということは、自分の財力を維持し、誇りのある庭を養い続けなければいけない。庭というものは、そういうものなんですと、普通の庭師はいうのです。ですから僕たちがもし景色に対して、それからまちづくりや風景作りに対して、安易な考え方で挑むなら、僕たちは財力を失った、そして風景を養うことのできない自分たちになり得ることがあるのです。

角館の風景というのは、長い時間がかかって作られてきました。僕たちはその恩恵にあずかり、たくさんのお客さんが来てくださり、喜んでくださいます。それに対して、できるだけのもてなしをしようと思っています。角館人としては、そのことを十分に認識しているわけです。

作品は、いかに共感を得るかということで成り立ちます。角館の街の景色も、そうだと思います。ここにゴールデンウィークに 140 万からの人たちが来てくださるのは、桜を見

るだけではないと思います。景色の中には、そこに住んでいる人たちも含まれます。景色というのはただの木や山をいいません。この街を作ってくれる人たちは、周りにある山や川を含みながら、武家屋敷通りを作ったのだと思います。その後の 300 年間、僕たちはこの風景をずっと見続けてくることになります。もしこの風景が似合わなければ、庭の木や大きな邪魔なものを切り倒したでしょう。しかし僕たちは、不釣り合いと思われる大きな木が生えている庭を維持し、それを自分たちの誇りだと思って維持し続けてきたわけです。この中には、角館の人たちが思う、武家屋敷や街に対する思いがあります。その街がこの風景を作ってきた。街に住む人たちがいて、風景があって、街というものが成り立っています。景色の中には、人も含まれます。この人たちがいて、僕たちは影響を受けた。

僕は一番最初に、自分が角館の景色・風土の中からさまざまなものを学び、それを作品の中に生かしてきたといいましたけれど、その中には、そこで一緒に暮らしてきた人たちのことも、もちろん含まれるのです。あの人たちがいたからこそ自分は作品が書けた。あの人たちがいたからこそ、自分たちは作品を作ろうとした。その背景にあるのは、ふるさとという景色です。ふるさとという景色の中には、人々、それも今の人々だけではなくて、おじいさんやおばあさんやその前の人たち、すべての人が含まれて、景色が成り立っています。

角館の景色は、人を含め文化財として優れたものだと思います。この後私たちがこの作品をどうしていくかは、僕たちが決めること、皆さんが決めることです。その中では、僕たちは安易に景色をいじることをせず、心してかからなければいけないと思います。僕は、自分は角館の作品の一つだと思っています。僕は角館の人たちのことを書きます。角館の人たちは、僕の作品の一つです。角館を作ったのは、角館の人たちです。長い時間と歴史が角館の街を作りました。街と景色と人というのは三位一体です。互いに影響し合いながら、互いの感性と思いやりを持ちながら、角館という景色を作り上げました。僕はそこで育ち、今角館に半分暮らしながら街の中のことを書き、この中で遊ばせてもらいながら、恥ずかしく大げさな言い方ですが、自分は本当に角館という街が生み出した作品であり、皆さんも角館が生み出した一つの作品なのです。

それから角館という街は、皆さんの生み出した作品です。これを維持し続けること、僕たちが生きていく 60 年、70 年、80 年という短い時間は、景色をいじるには余りに短すぎます。もし本当に景色に対して何ができるかといえば、僕たちは慈しみ育てていく。それから長い目の上で、景色というものを考え直したとき、初めて自分たちの持っているもの

を変える資格を持つと思います。

　角館、僕はこの街が大好きです。この後も、自分はここで生きていきたいと思っています。それは、皆さんという角館のという景色があったのと、角館という美しい景色の中で育ててもらった自分があるからです。ありがとうございました。（拍手）